

校長室だより

☆教育目標☆

自ら考え判断し、進んで行動できる富中生
〈生活心得〉 時を守り 場を清め 礼を正す
令和元年9月27日発行 No.11
富岡市立富岡中学校 校長 中村 喜雄

☆☆がまんする力・耐性☆☆

「幼児性自己中心症候群」、以前いろいろな場面で使われていた言葉。この言葉を御存知ですか。これは、幼児期のわがまま・自己中心的な気持ちを、そのまま引きずって青少年期を迎えてしまった子どもたちの中に見られる病的変化のことですが、これが原因で、ここ数年、全国的に青少年期の少年・少女の事件が多く発生しているといわれています。調査によりますと、殺人や傷害など重大な犯罪を起こした少年・少女たちの大部分が、自己の感情を自分でコントロールできず、すぐにキレル状態にあったということが多くあるようです。

それでは、現在の中学生はどうでしょう。一般論ですが、物質的に豊かな時代に生まれ育ち、しかも少子化が進み、“自分の気持ちを抑える”というセルフコントロールができない子どもが多くなっているような気がします。さすがに、何でも自分の思いどおりにならないと怒るとか、ちょっと気に入らないことがあるとパニックを起こして暴れる等の行動は見られませんが、生徒たちの心の中に、“がまんする力・耐性”が果たして育っているか考えさせられる場面があります。子どもたちの今までの成長過程の中で、我々大人が“価値あるがまん体験”をさせるのが少なかったのではないのでしょうか。幼い時、「お腹が空いたけどがまんした」「転んで傷ができて痛かったけどがんばった」「遊びたいのをがまんして宿題を先にした」「疲れていたけど野球の練習でがまんして走った」等、このような“がまん”は、多くの子どもたちは経験しています。ところが、「状況を考え大変な仕事を自ら進んでがまんして行った」「自分のことは後回しにしても相手のためになるよう、人の嫌がることもがまんして行った」等の経験は意外と少ないのかもしれませんが。

ともあれ、“がまん”とは、ある目的があり、それをやり遂げるために自分を抑えるということであり、自分のやりたいことをやってしまうとか自分の気持ちを抑えられず何でもやってしまうといった“わがまま”“自分勝手”とは対極にあるものです。大人も子どもも、「だってやりたい気持ちが抑えられない」「まあいいや、少くならなかまわないだろう」という意識だと、なかなか“がまんする力・耐性”は育ちません。我々大人が多少苦労しても、将来の生徒たちの夢につながり、すばらしい人間、信頼される大人に成長していく大事な資質として、
“がまんする力・耐性”を養っていくことが大事だと考えます。

本校では、清掃の時間を“心を磨く時間”として位置付け、まず、人の迷惑となるおしゃべりをがまんする“自問清掃”を行っています。生徒たち自身が、“がまんする力・耐性”を体験し学ぶ活動となっています。



